

# 白金菰

7月号



平成28年11月13日我孫子の一步亭前



令和元年7月発行第100号

定例会会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

八月は休み

九月二十日（金） 第三正午～三時…当季雑詠五句

十月四日（金） 十時半～三時…山種美術館

十月十八日（金） 第五正午～三時…当季雑詠五句

七月例会句会報 （'19/7/19 9名欠1）

光成高志

三日目の花托の黄色雌蕊也

瘤白鳥番が二羽の子を連れて

蒲原に大きな蓮の花咲けり

野分けして蓮の葉皆裏返る

カヌーゆく添ふ蓮見船抜いてゆく

佐藤宏之助

舞妃蓮まだ一片も散らさざる

エンジン止め蓮沼の迷路ゆく

今生の別れに蓮見舟に乗る

明日咲く蓮華と船頭竿で指す

蓮を見て蒲見て傘寿を自祝せる

扇風機猫の鳴き声出す不思議

蓮見舟の待合室に米袋

涼風や大橋真ん中潜りゆく

岸辺には救助訓練蓮見舟

四日目の蓮の花托の黄色とは

光 みち

モーター音川鵜飛び立つ蓮の沼

うちわやんま道案内す蓮見舟

見渡せる沼を覆いて蓮の葉や

あそこにもここにも蕾蓮の沼

沼の風涼し蓮の葉裏白く

浅野正美

船宿に猫の置物蓮見かな

船宿や目高の泳ぐ池のぞく

手賀沼のカップに逢いに蓮見船

時速四十キロの蓮見の船に乗る

田宮敦子

空にとんび蓮見しながら沼巡る

磯目健二

絶る猛る選挙カーの上梅雨湿り

武者昭七

船宿や魚拓古色に蓮見客

象鼻杯大吟醸のつもりなり

蓮見舟あと白波の橋くぐる

沼底の泥に白骨蓮の花

尺鮎の穴場と知らず蓮見かな

増田陽一

夜鴉の昼飛ぶときを立ち眩む

岸歩く雉を見ている蓮見舟

沼なれば水薙ぐ鳥のコブ白鳥

妻の忌日ことりと揚羽生れたり

展翅せり妻かも知れぬ揚羽蝶

飯田孝三

鵜が杭に翼十字にかつ窄め

眼中の物浮子一つ源五郎

爺四五人贅に草とる梅雨晴間

七月や得手に帆を揚げ宜候う

武者正子

熱砂に強雨生けるものの匂い立つ

かたつむり体のばして床運動

梅の実を煮つめてジャムのつや楽し

未明から座して聴く夏鳥の声

山門に蓮の鉢置く昼下り

一句鑑賞

光成高志

舞妃蓮まだ一片も散らぬ

宏之助

舞妃蓮とは今の上皇が皇太子時代に皇太子妃に因んで名付けられた蓮であるとか。ボート棧橋へ行く手前の池が蓮池になっていて多くの舞妃蓮が咲いていた。開きき

つて花卉を垂らしても一片も散らずに頑張っている蓮に感動しての投句であろう。

沼の風涼し蓮の葉裏白く

正美

正美さんの五句が当日の吟行をよく描写しています。

その中で掲句は梅雨明け間近の暑さを予感させる目でしたが、蓮見船に乗って沼に出れば風涼しく、一面の蓮葉の野を分けて沖側は裏返り白く見えた。二つの現象をうなづけている句ですが、よく味わえば当日の景色がすぐ再生される佳句です。

四日目の蓮の花托の黄色とは

みち

開花して三日目と聞いたのですが、みちさんは四日目の蓮の花托が黄色なのに心が動いたのです。花托は花の真ん中の漏斗状の基部です。これが蜂の巣に似ていることから蜂巢、転じてはすになった。花托の中にある蓮の実は、生で食べられる。昨年宏之助さんが食べたので私も噛んでみたら団栗の味がした。ここはその前の黄色、黄緑がかった微妙な黄色の花托を見たのでした。

あそこにもここにも蕾蓮の沼

正美

長梅雨の今年、ぐずついた天気が続き、花は咲いていませんよと小池ボートのおかみさんから電話があったが、大丈夫俳人は何でも見ますからということで、日程を変えることなく出船したら、掲句のようにあちこちによく

見れば蓮の蕾が水面に顔を出しているのを見た。蕾でも葉群の中に見つけるとうれしくなる気分が出ています。

空にとんび蓮見しながら沼巡る

敦子

句の通り空に鳶が蓮見しながら輪を描いて飛んでいるいや私らは蓮見しながら沼を巡っているのだ、その大景が鳶の目のように見えてきてそこが佳句の所以です。

受贈誌（令和元年東京クラブ七月号）

かづひろ

四葩揺る稲荷社の赤褪せゆけり

璃子

おはようとラインに届く蓮の花

栄

茜雲丘を越え行く夏の蝶

文男

廃山を去らぬ同士の祭かなあすか七月号

山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート六月（河津）

釣られたる鮎に交代四鮎

光成高志

川に立ち五体満足鮎を釣る

光みち

デザートの欠けある茶碗真桑瓜

山尾かづひろ

滝しぶき羊歯に乾く間与へざる

長屋璃子

九つ罅の住人たち ―「龍潭譚」卒読―

武者昭七

龍潭譚を読んでいると二人の不思議な年寄りに出会う。同一人物か否かは明らかではない。それぞれに「漢」

（躑躅か丘・老夫（五位鷹）・おじ（渡船）とかき分けられている。まず第一の漢（おのこ）との出会いの場面。波のようにうねりながら真っ赤に咲き誇る躑躅の群落。一人で行ってはならぬとかたく姉君にとめられている秘境である。夕暮れがすでに影をおとしている。魔に出会うという不気味な時間帯だ。異界が翼をひろげたのだ。そのとき少年は「向こう鉢巻き」して一束の薪を背負って山を下ってくるおとこに出会う。すれ違いざま男は「危ないぞあぶないぞ」と言いすてて去っていく。少年は気にしない。いったい何が迫っているのか。なにが危ないというのか。誰も知らない。ミステリアスな展開を期待させる言葉である。第二は谷のぬしと思われる美女が少年と対座している庭先にやってきた老夫のことばだ。「はい、これはお兄様がござらせたの、可愛いお子じや、お前様も嬉しかろ。はははは」。美女に児がないくらいは先刻知つてのことだろうに。この揶揄とも皮肉とも取れる言葉の意味はなにか。少年が「屋根を揺り動かすすさまじいおと」のうちに、「もののさけびたるこえ」を聞いて恐怖におののくのはその夜のことである。あれはいったいなんだったのか。最後は、少年を送り届けるために老夫が舟を操る場面だ。船は水面を滑るようには進まない。ぐるぐると竜巻のように身をよじり旋回し回転

しながら地上に向かって上昇する。それにつれて美女もまた谷の縁を旋回する。家に帰りついた少年を迎えたのは生霊に取りつかれた気遣いのもてなしであり嘲笑であった。姉上だけがかばいてだった。一夜の嵐に九つ罫は無残にも崩れ去り少年は成人して海軍士官となってそのあとに立った。少年にとつても谷の若く美しい人にとつてもあの怪しい一夜は忘れ得ぬものとして息づいている。芭蕉のかるみ以後（53）  
光成高志

紀行文がいつ書かれたか明かでないが尾形仿著の評釈では旅を終えた時期をあまり隔たらぬ折、遅くとも貞享三年（二八〇）冬までの間に草されたものとする。大淀三千風の日本行脚文集の巻末に書かれている文言と同じように、俳諧師としての恩賜の方への一礼のために書かれたものである。つまりそれは、芭蕉の人と芸術を理解するごく限られた連衆のために草されたのだ。野ざらし紀行画卷も同じ時期に描かれたもので、尾形氏の評釈の底本となっているので、その絵をスキャンしてここに載せ、中の大部分を抜きし冒頭と紀行末の絵のみをここに示した。絵巻であるから一枚二枚と非連続に数えられる形ではなく連続した絵巻、別な言い方では画卷になっているのだが、途中で切って貼り付けたまでである。画



巻の写真を載せた本の更にコピーしたもので、ぼんやりとしか見えないが、冒頭の紀行文に続き旅立ちの二句、即ち「野ざらしを心に風のしむ身かな」秋十年かへって江戸をさす故郷（変体仮名で書いてある）の後にやや空白を置き、遠景に城、中景に森の中の寺塔、近景に海に面した海道沿いの聚落を、すこしずつ位置をずらしながら箱根越え

の句文に続けている（この部分は写っていない）。城は江戸城、寺塔は池上の本門寺（当時の絵図によく描かれているもの）、海沿いの聚落は小田原の町らしい。深川より箱根に至る道程を遠景・中景・近景と、右上方より左下方へ斜めにずらせた断続的な画面となっている。この画卷は芭蕉自画自筆卷子『甲子吟行画卷』（御雲本）であって最終稿と目されるものであるから、この構図は芭蕉の描いたものである。尾形仿著「野ざらし紀行評釈」では十四章の章題をつけ、その最終章が「惜別・帰庵」である。この該当部に相当する画卷を次に示した。紀行文では命二つの句が書かれそのまま文章が続き連山の上の余白を埋めるように横並び、びつしりと三文字ずつ書きつらねられ、いくつもの山頂を越え谷間を過ぎて、「梅窓ひて卯の花拝むなみだ哉」が山の途切れたところに三行書きされている。ここは図の右側に読み取れよう。画面は一旦途切れるかに見えるが、文字は隙なく続き、突然濃墨で「杜国に贈る」という一行が画面の上高く始まる。そして「白げしにはねもぐ蝶の形見哉」が又三行書きに書かれ、句文がどんどん書かれ最後の「夏衣いまだ風をとりつくさず」の下に大きな川の流れが兩岸まで見え、そこに大きな橋が架かっている。この橋の渡口で風の句が書かれている。句下に小さく描かれた集落と対比してこ

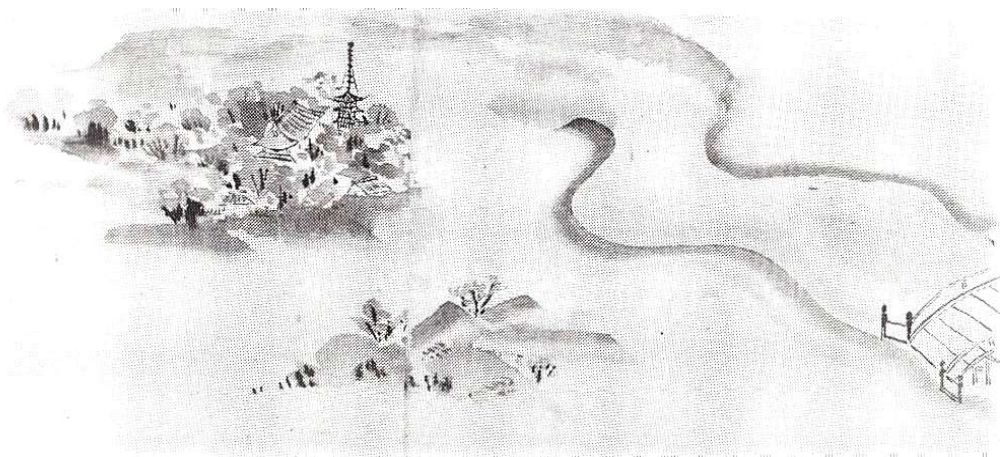
の橋の大きいこと！。これは芭蕉の心象の大きさなのである。栗田勇著の芭蕉ではこれを夢の浮橋と名付け、これこそ甲子吟行画巻の語られざる真情<sup>まこと</sup>といつていいとぞ。続く画巻の橋を渡り切つて遙かに見える五重塔の橋寄りに集落の屋根が見える。山形と長方形の淡墨で描かれた幾棟かの人家の屋根のつらなりが、先の集落より大きく描かれている。屋根の間には庭樹らしい幹と梢がはつきり描かれてある。左上方には、大きく曲がりくねった大川の行く手遙かに五重塔がみえる。巨<sup>おほき</sup>な本堂の屋根を囲むようにびっしりと樹木の幹と茂みが描かれ境内の大門といくつもの屋根を埋めて樹木の海がひろがっている。以上のおぼろげながらコピペした三つの絵の橋と塔と集落の大きさをくらべてみると、豆粒のかたまりほどの旅立ちの集落が一番小さい。二番目は橋の左上方の五重塔を囲む樹海であり、それより大きいのが手前の数軒の民家の屋根と庭樹である。そして更に巨大なのが、画面中央を左斜めに流れる川と橋ということになる。いずれも俯瞰図である。多くの解説では、川や塔の名を示さず、用心深く「隅田川と上野」と地名で表記している。江戸を象徴する川といえは、先ず隅田川で良い。また一番賑やかな地名は五重塔で知られた寛永寺が代表する上野というもうなずける。芭蕉の心象風景としては、

一番大きく描かれた大橋に近い集落、ここは芭蕉庵周辺ではなかるうか。この集落の三角屋根や庭樹の葉の幅がとくに広く、葉脈が一筋濃く描かれている。このような特長のある植物はなんだろう、と栗田勇著では遠慮がちに解説してあるが、私は明らかに芭蕉庵の芭蕉であろうと思う。三角屋根は建築用語では切妻屋根である。今の祠のような史跡を思い浮かべてはいけない。それにしても芭蕉直筆のこの画巻の最後をしめる心象風景の中のこの大橋はなんという橋であろうか。どこにも既述されていないとか。栗田氏はここを考証しているが、結論としてこの大橋は寛文元年（一六六一）に完成した大橋であるとされている。今の両国橋である。新大橋というのは元禄六年に突貫工事にて竣工したもので、この時はまだない。新大橋が架かった時には芭蕉の数句が残されているが省略する。氏は芭蕉庵に近い橋への思い入れが深かったのではないかという芭蕉のころばへを推測して橋の句を解釈されている。そこまで思いを飛ばさなくても、画巻のこの大橋をよく見れば芭蕉の心が吾が心に飛び込んできくる。野ざらしを覚悟で旅をしてきて、江戸を前にしてこの橋を渡れば私の俳諧の天地に戻る。いや今までの旅が風雅の誠を尽くした世界、そこから又江戸の生活の中に入っていく。これからは今までと違うのだぞと。



この絵の視点はどこにあるのだろう。私は透視図というのを習った。見る者の視点を定めその両側に収束する位置を決めて遠近を表すのだが、この橋の視点は橋の上に立って左右の風景を描いた、実写的ではなく、心の風景のままに描いたのである。そうしないと橋が中央にてこんなに大きく見え

る筈はない。これを見ている人は描かれていないと氏は書いているが、それは絵の自由な技法を知らぬ人の言い分だ。描く人は描かないのが常識である。想像とはどこにでも人は立ちうる。第一後世の蕪村に有名な「稲づまや浪もてゆへる秋津しま」（明和五年一七六八）句がある。蕪村の想念は稲妻の走る天上から、そう雷神よりもっともつと天の高みから一瞬の閃光に浮かび上がった日本列島を見下ろしているのだ。以前皆で論じ合ったことがあった。それはさておき、芭蕉がこの紀行で追い求めてきた真実の「物の見へたる光」の世界ではなかったか。栗田氏はこれはアインシュタインの相対性原理やハイゼンベルグの量子力学に近い世界ともいえよう、と書かれている。光というのは波とも粒子とも見方によりどちらにでも取ることができるのは今の科学で明らかにされている所だ。だから、芭蕉の物の見えたる光というのは物の本質、突き詰めて行けば今の量子力学の分野に入る訳だ。星の終焉の超新星爆発から飛んでくるニュートリノを観測できたというのが最近の快挙である。これも粒子かと思いきや波動理論でも解釈できる性質を持っているとか。私の小学一年の入学式の校長の話に湯川博士のあれは中間子理論でしたか、物を突き詰めて行くと太陽の回りをぐるぐる回る地球のような構造があつて云々と黒



板に太陽系のような図を書いて説明していた光景を今でも妙に覚えていたが、あれと同じような思いを直感的に昔の芸術家は掴んでいたのではないだろうかと思いついてはいる。祖母などはそうなんではなからうかと、空海の悟りの場所の伝承からも私はそう考えている。芭蕉も物の見えたる光というのは、分子原子中性子中間子それにニュートリノ、天才の目には、その心眼には見えていたのではなからうか。これが私の想像です。それを文

芸という和歌や物語や近世の連歌俳諧という形式で表現しているのではなからうか。この芭蕉自筆の面巻の墨絵は山水画の分野にはいるらしい。芭蕉は中川濁子に清書を頼む時に述べた言葉が残されている。「此一巻は必ずしも紀行の式にもあらず、たゞ山橋野店の風景一念一動をしるすのみ」と。一念一動とは、一つ念じて一つ情を動かしたということか。思いと感動を風景に見出して描いたものだというのがだ。

#### 俳窓評論集

\*土芳のあかさうしに残されている芭蕉の言葉を信じてこの一部を引用すれば、「師の曰、乾坤の変は風雅のたね也といへり。静なるものは不変の姿也。動るものは変也。時としてとめざればとまらず。止るといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散乱るも、その中にして見とめ聞とめざれば、おさまることなし。その活たる物だに消て跡なし。又、句作りに師の詞あり。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。」右の物のみえたるひかり、とは何ぞ。光は現代物理学では波動ではなく、上述の如く、突き詰めて行けば粒子であるという光量子仮説に行き当たる。そのことを最近の新聞記事で中高生対象の塾の講師であるSEGの吉田弘幸の解説文が載った

ので、光の最新の説を要約してみる。質量の定義を考えるとという命題にて書かれている。kgという単位が130年ぶりに変更されたという説明に出て来る。これまでは「国際キログラム原器」と呼ばれる分銅の質量がその定義だったのが、自然界の仕組みを特徴づける普遍的な定数「プランク定数」を使う定義に変更された。光のエネルギーについての関係式  $E=h\nu$  の  $h$  がプランク定数。この値を厳密に決めることで質量を決められる。それが質量の新定義だとか。プランクはこの定数を発見したドイツの物理学者の名前。ニュートンと同じように人名を当てる。プランクは1900年ある実験結果を説明するため、連続的に変化すると考えられていたエネルギーが実は飛び飛びになっていると仮定した。エネルギーに粒々があるようなもので、この一つの粒を量子と呼ぶ。これが量子仮説と呼ばれる現代物理学の量子論の端緒となる革命的発見であった。1905に発表されたアインシュタインの光量子仮説に引き継がれ、光に粒子性があるという考え方。当初は観測結果を説明するための仮説だったが、現在では理論として確立している。光の粒のエネルギーは色に対する振動数とプランク定数  $h$  の積による先の式で与えられることが分かっている。新しい定義では、プランク定数の値を正確に  $6.62607015 \times 10^{-34}$  (ジュール・秒) と定め

ることでkgを決めている。ジュールはエネルギーの単位。長さの単位もメートル原器での定義から、「一秒間に真空中を光が進む距離の  $\frac{299792458}{1000000000}$  分の1」という光速  $c$  に基づく定義になった。 $c$  は  $3 \times 10^8$  というアインシュタインの特殊相対性理論で導いた質量の本質がエネルギーであるという式に出てくる。この  $c$  も今年度の京大の入試問題に出てきたので、冒頭の塾の講師の説明を依頼したものらしい。見たままの句というのは何かがあるわけではない。無なのである。見た一瞬の光なのである。その瞬間賓客未分の一瞬が虚空にあるのを作者は見たのである。ジャコメッティが森に入って樹を見ていると、じっと見ていると、自分が樹を見ているのではなく、樹が自分を見ている瞬間があるとか云ったとか、これは話で聞いたことがある。その瞬間は芭蕉の云う松のことは松にならず、竹のことは竹に習えというのはその一瞬ではないか。ぼおとしていたら、すぐ消えてしまう一瞬であるから心に消えぬうちに云い止むべしとなる。感動が大きいとその感動に浸っていて詞にならぬことが多い。形式に当てはめて詞にするにはそこで冷静な頭脳が働かなくてはならない。この間を心に保持するのが難しい。大抵は忘れてしまったり、もう一度あれをと思っても二度とその瞬間を得ることが出来ない。夢のようなものだ。

## 小山陽也さんのこと

光成高志

陽也さんの訃報が璃子さんよりもたらされた。七月十二日の葬儀に参列して弔意を表して来た。前日の通夜には多くの現役の構造設計関係者が参列されたとか、根本さんの手紙にあり。私は火葬場までお伴をと思いましたが、さすがに遠慮致し、数名の方々と追悼懇談会をして別れました。次から次へと小山さんと、それに陽也はるなりさんとの思い出が湧いてきて頭が一杯になり、よく喋りましたし、夜も安眠が出来ませんでした。まだもやもやとしたものが残っています。ここで大急ぎにて追悼文を書いて明日からの新しい日を迎えたいと思います。右に小山さん、陽也さんと書いた所以は仕事での付き合いは小山さん、俳句での付き合いは陽也さんとお呼びしていたからです。疾うの昔に亡くなられた安藤さんが私を社内で紹介して回ったのに最初に反応されたのが小山さんでした。それは昭和四十二年（一九六七）春でしたので、もう半世紀も前になります。それからあちこちの仕事や私に依頼され、それが明石町の会社に移られた後も続き、確か建築センターの認定を受ける時のアドバイスをと頼まれた時まで続けました。水上の崖地でのホテル計画の現地視察も同行を頼まれたことも思い出します。

父様です。この句を鑑賞することで私の小山陽也さんを送る言葉にしたいと思います。藤房は藤の花です。藤の花は総状花序になって花を垂らします。蜂にも風にも雨にも花を垂らしたまま、気ままに遊ばれてしまいます。しかし、そのまま垂れて平気でいます。外界に任したまま、つまり蛆の鯉のような状態で静かに房を垂れている藤房の泰然とした様は藤房の心ではないか、そういう覚悟を決めた心に静まってきた。私の心も藤房の垂れている心のように静まってきたと述懐されているんですね。この句の詠まれた場所は京都の伏見、平等院や桃山城は藤の名所です。詠まれた時は昭和四十九年五月でしょう。泰里氏はこの年の暮れに亡くなられておられます。小山陽也さんが今このお父さんの心境に到達されているとは思えません。まだまだ俗に浸って一仕事も二仕事もしなければなりません。お父さんは色々苦労されましたが、「人目ほど不遇ではなく難飾る」という句もありますように、二足のわらじを履いて、人の二倍を生きた人だと思います。そのご子息の陽也さんが今度長く勤めた一会社を辞められる。まだまだ親の心に到達する道程は長いですよと申し上げたい。そういう意味で小山さんをもう一度励まして送別の辞と致します。平成二年九月二十五日

光成高志

この頃の私は山口誓子の天狼に入って俳句も仕事も蒸気機関車が坂をのぼるごとく忙しく励んでいたのですが、小山さんは勉強熱心なのは分っていたのですが、俳句もお作りになったらしいですよと会う度に勧めていました。

そういうことは五〇年の間に沢山ありましたが「流れる雲のように」には書いた覚えがあります。会社をお辞めになったのは、これは写真もあり私のスピーチの控えもあるので間違いありません。平成二年（一九九〇）秋のこと、その一年前に私はお父様の小山泰里句集を読むという一文を冊子にして差し上げています。つまり平成時代は俳句にて陽也さんと付き合ったことになります。陽也さんを正しく読める人は稀でした。俳人であられたお父様ならではの名付けだと思います。春になるとそう二月頃の空のきらきらした陽光が仰げる頃は、ああ春の太陽だと思えますね。それを見て春也、いや陽也となったのでしょうか。それはさておき、その前年だったと思います。車中でつり革を握つての立ち話に私も句集を編んでいるとか云われるので、驚いて見せてください、いや親父の遺句集を作ったのだよと言われた、それを暫くしていただいたので、先述の鑑賞文を書いたのです。平成二年秋の退職パーティーでの私のスピーチはお父様の句にかこつけて小山さんを励ますつもりでした。ワード原稿が残っていたのでそれを左に転載します。急ぐ方は飛ばして下さい。

「小山部長へ

藤房の垂れし心に静まりぬ

これは小山泰里氏の俳句です。小山泰里氏は小山陽也さんのご尊

誓子没後はその一派の結社で妻と共に俳句と仕事の二足のわらじを履いてよく旅にもでしたが、一派の俳句が物足りなくフリーの時を経て平成九年（一九九七）から飯田孝三さんのすすめがあり、八丁堀句会を立ち上げ、翌年には陽也さんを誘い会社が引けた後の夜の隔月の句会をもちまして、これは私の定年の年の春（二〇〇二）まで続けました。陽也さんがそういう私を許したのか、八丁堀句会を始めて三年目（平成十二年六月十四日）でした。押上に行く私の社用に乗じて、昼間陽也さんと会いました。梅雨最中のことでしたが、雨はなく、陽也さんの歩くままついて行きました。狭い水路伝いに歩き、あれが花王の工場、これがお宮さんと時々言葉を発して、私はどこへ行くんだろうと思いつきながら黙って吟行の積もりで句を書きながらついていきましたら、ここが私の家という陽也さんの家につきました。その時のことが、句帳を探し探して出て来た、それを見ると、52番の句帳でありまして、今見ると十六句作句しています。お宮さんというのは、吾嬬神社のことで、古事記に出てくる日本武尊の奥さんの弟橘媛を祀つてある宮です。今の立花という地名も弟橘（立花）媛に因むということが今分りました。歩いた水路は北十間川、古木の楠もこの伝承にかかわっているらしい。二三その時の吟行句を書き留めておきます。

梅雨晴間十間川に魚の列  
鉦鳴らしアイスキャンデーを売るバイク

楠若葉雷除けの注連飾る

夾竹桃吾婦神社に咲きそむる

鶏頭や草庵風の小山邸

小山邸の別邸に移り小山さん、いや陽也さんと随分話し込んだのを覚えております。小山さんは建築のことを、私は俳句のことを話しましたので噛み合わない話でした。後の本棚に親父の句集だよと振り返られただけで見せては呉れません。それをよく読んで作句すればいいのですよ、と繰り返し、陽也さんは大江新太郎は明治神宮の設計をした人、その息子さんが大江宏、法政大の教授、ここまではメモしていたので書けます。その他私の友人でもあった黄弘量さんの講義を聴きにく、土曜日は医者通い、とかメモにあります。夕食にと夫人が鰻重を二つ持って上がってこられた。邸を辞したのは八時になっていました。小村井駅に出てその時私は鵬外がよく書いている暗愁もよおすという気分だったことも覚えております。追悼の死者をほめたたえる文を誂<sup>い</sup>というそうですが、そうならない文章で恐縮ですが、私の思い浮かぶままに書いています。先の八丁堀句会の後の私は氣に入った主宰の結社が見つからず、昔よく通った建研跡地の俳

で我孫子訪問を促したところ、すぐにお出でになり、駅近くの一步亭にてランチ懇談会を持つことが出来ました。後、加納治五郎邸跡、志賀直哉邸跡など案内して駅でお別れました。考えてみたらそれが元氣なお姿を見た最後でした。上野や東京駅の吟行句会にはお出でになり、御徒町の梅の花での会食を取り仕切りされました。もうだいぶ書いたので切り上げなければなりません。秋に我孫子に來られて半年後の春に脳出血ということで入院された。私のカテーテル検査三日目後、私とみちさんと飯田橋のリハビリ病院にお見舞いに伺いました。テレビのある談話室で一人座っておられて、私を見ると、光成さんと云われ、三人で話をしました。右手が効かない、それなら、左手で字を書く練習をしてくださいと、みちさんはノートとボールペンを出しましたが、そのそぶりも見せません。陽也さんはお孫さんが東大に入った、入ったと何回も言われた。その時涙を流しておられたとみちさんが云う。陽也さんはどうも東大コンプレックスをお持ちであつたようだ。最近は隈研吾がどうのこうのと皆の前でふれておられた。今在学中のお孫さんも読むかも知れないのでここに敢えて書いておきます。学歴は数学で云う必要条件かも知れないが、十分条件ではない。かも知れないですよ、ほんととは大学へ行かなくても学問は

句文学館に行つて全国の結社誌を通覧したりして、試しの積もりで他結社の句会に出ました。道場破りのような目を感じましたが、築港、屋根、濱、童子、それに萱に入りまして、句作は続けていました。地元の湖畔吟、葎の会には毎月出ておりましたが、もう何回も書いた事で、葎の会の嘉久先生が亡くなられてその後を継ぐ積もりで、布佐から、手賀沼畔のアビスタに場所を移し、今の白金葎を創刊しました。丁度あの大地震が起こった春に創刊句会を予定していましたが、アビスタが閉鎖して使えず通信句会が第一号になりましたので、よく覚えております。それまでに飯田孝三さんとの葉書句の管見を頂いていたこと、武者昭七さんを連れてこられたことなどの協力があつてのことで、平成二十八年（二〇二六）には五周年記念号を出版出来ました。これも陽也さんからの基金や励ましがあつてのことで感謝しておりました。句会には出席されず、毎回古代という栗おこしを差し入れられました。一度我孫子にお出でくださいと私は何回もお願ひしました。又お父様のいい句集があるんだからお読みになって真似をされればいいのですよと会う度に申し上げましたが、いつも馬耳東風でした。しかし、先の秋にみちさんが白金葎の女性の方々が陽也さんってどんな方と言われ、皆さん会いたがつておられますと葉書

出来ます。その氣になり努力すれば出来ます。戒名が陽也さんの人生を表していると思いますのでこれを記して終ります。 積善院計徳瑞陽居士

追記・左に陽也さんの句を少しだけ抽出しました。

老ふたり内裏雛だけ取り出せり (H16・八丁堀句会)

カヌー漕ぐ上に玉堂美術館 (H)

扇風機力タンカタンと首を振る (H28・五周年号)

七草粥蓬齋は庭の草 (H)

下町の柏餅には重さあり (H)

迎賓口高野槇と五葉松 (H25・東京駅)

お便り広場 (到着順、敬称略)

前略 白金葎令和元年六月号届きました。返事がなかなか送れなくてご免なさい。私事で6/10起床時目がまうあくびが続けて出る体調の変化に気づき救急の手配をして中国中央病院へ搬送されました。CT心電図とかいろいろ検査されましたが何の異常も認められません。強いて言えば一度耳鼻科の診察を受ける必要があるかとも思います、なぜ今朝のような症状が出たのか説明をお願いしたところかかりつけの医師に聞いて下さい、私達の仕事はここまでですと。何か大きな総合病院は冷たいと感じて帰りました。帰り石川先生に相談したらそうです

ね一度耳鼻科を紹介しましょう、米田耳鼻科の診察を受けました。耳鼻科の方からくる目まいではないと思います、加齢による血管の老化のため急な動きにたいして血管の流れが遅れることが原因かと思えますとのことでした。即刻生命にかかわることはありませんと思います。これが正解かなー？物事急がずにゆつくりするよう心掛けて下さい。(中略 私も米寿を過ぎ人ごとではないなーと感じながら暮らしています。あまり先を考えずに今日一日を生き抜く力朝起きると今日も何と目が覚めたそれに感謝して幸せな気持ちを味わおうと思います。寝るときは今日も一日終ったと安堵して床につきます。こういう心がけて生きて行かねばと考えています。以上私のことです。私だけでなく世界の人皆一年々々々を重ねるのだ。高志もみちさんも体調に気を付けて俳句楽しんで下さい。(後略) 草々 (71健三)

光成高志様 思いがけなくお会いでき良かったです。これも小山さんのお陰ですね。お通夜で多くの現役OBの構造設計関係者が参列しました。小山さんの人柄が偲ばれます。コーヒーが好きでよく喫茶店を見つけてきては連れて行かれいろんな話をしてくれました。(アチ巨公野繁未了)退職後かわりませんでした。日一日寂しさは大きくなります。本当にいい人でした。俳句の大先

生に恥ずかしいのですが今の心境です。行く春やコーヒー好きの大先輩

万感や薫りて逝けり冬北斗

撮りました写真同封します。機会がありましたらお会いしましょう。お元気で・・・。(715根本大治)

長梅雨がいつ明けるか待つ日々ですが、いかがおすごしでしょうか。過日は小山陽也さんの葬儀告別式でお世話様になりありがとうございました。早くも新盆で二河白道を駆抜け彼岸に達せられたことご冥福を祈るのみです。お見舞いもできぬまま再びお目にかかれぬこととなってしまいました。亀戸は二度ほど行きましたが神社目的でなく行き駅の出口が違っただけで町の子の違いにびっくり昔からの商店も沢山あり、駅にアトレがあり、なかなか便利なところです。東京都内であれ行ったことのない町も沢山あり、いつでもお初に行く処は期待に満ち、又、裏切らない珍しさ楽しさがあるのです。この度も不謹慎ながら違っ町違っ風情をひそかに楽しみました。東京クラブ七月例会は十三日(土)で、小山さんの葬儀の翌日でした。「四葩揺る稲荷社の赤褪せゆけり(かづひろ)」私の思いすごしですが、小山家の庭に屋敷稲荷あり、初午に神主さんと呼んで祝詞を上げてお祭りをしていたが、神主さんも古い親戚も老いたとお話を聞

いていましたので、小山さん亡き後職の新調もなく人集まらずこの句の如くなるであろうかと弔句のように受け止めました。(この句は千葉での写生の由)いろいろ思い出ししみりしておりましたら、梅雨の晴間をいいことに庭のブルーベリーがやつと明るみ始めたのをねらい、尾長が来ているではありませんか。網戸を叩いて追い払うと云う現実には立ち帰りました。みち様とおめもじできませんでしたが、お二方様のご健康とご活躍を願っております。ごきげんよう。(718璃子)

我孫子日記

6/21	例会
6/30	柏(沖縄の歌)
7/5	* 高崎(土屋文明)
7/6	*2 妙義神社
7/12	*3 葬儀(陽也)
7/13	ACC(源氏物語)
7/15	上野(ヨガ)
7/19	蓮見舟

\*バス降りて埴輪の里の苜蓿(みち)

青芝に武人埴輪の並びをり(リ)

前方後円墳をなぞる夏燕

夏草の小山の双子山古墳(みち)

\*2 青梅雨や愛妻橋渡り恐妻碑

参道の脇の紫陽花色の濃し

総門に風鈴一つ吊られ鳴る

御神砂の小山にシート梅雨曇(みち)

蜘蛛よりも大き水馬上と下(リ)  
蟻穴に獲物入らず入れ直す(リ)  
参道に巨岩突つ立つほととぎす(リ)  
蝌蚪沈みゐて流水の音絶えず(リ)  
老鶯の長鳴き妙義山麓に  
水神社あつてちらくく水馬  
突然に狂ひ回るく水馬(みち)  
水底に蝌蚪水面に水馬  
妙義山巨石を覆ふ雪の下  
稠密なる緑は蒟蒻畑也  
\*3 真言や梅雨の通りに開け放ち  
普門院のお経ぐじゅぐぐじゅぐぐと  
編集後記

小山陽也さん追悼号のようになりましたので、表紙に写真を掲載しました。何か一句をとすれど才たなく椅子によりかかり、目瞑りてむりやりこの一句を手向けて、別るゝのみ。

長梅雨に晴れぬかなしき五〇年

白金霞七月号(通巻第一〇〇号) 令和元年七月三十一日発行  
編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・二二一九 我孫子市南新本二四・二七  
表紙の題字・加納綾女 写真は小山陽也さん来我孫子時&七月二十一日の白金霞